



JICA's world

AUGUST 2010 No.23

8

特集 観光開発

地域の宝を
掘り起こせ



「イスラエル／エジプト／エチオピア／ナイジェリア／ガーナ。これは、私たちがガン族がたどった道のりです。故郷のイスラエルをある事情で後にし、長い年月をかけてガーナに着きました。そのとき食料は底を尽き、飢えに直面していました」

ガン族の祭り「フォモオ」の由来をカルチャー・センターの職員アイザックさんに尋ねると、ガン族の大移動に関する伝説を語り始めた。彼らはガーナの沿岸部に住む主要部族である。

「私たちは一心に神に祈りました。すると神は穀物と魚を与えてくださいました。それ以来、神の恵みに感謝し『フォモオ』の祭りを行っているのです」

首都アクラで開かれるこの祭りは、8月初旬、各地区で盛り上がりを見せる。女性たちが特別料理「ケペケペレ」（トウモロコシの粉に魚スープをかけたもの）を作ることから始まり、翌日には、料理の入った大皿を持つ家臣やお小姓、楽団を従えた首長が、先祖の墓や縁の土地・建物回る。その途中で出会った人々には料理が振る舞われる。

一見にぎやかな「フォモオ」の祭りだが、そこには先祖たちが経験した「飢えの記憶」が深く刻まれているように思えた。



23

8月 フォモオ

祭りに刻まれた 飢えの記憶



文・写真＝飯塚 明夫

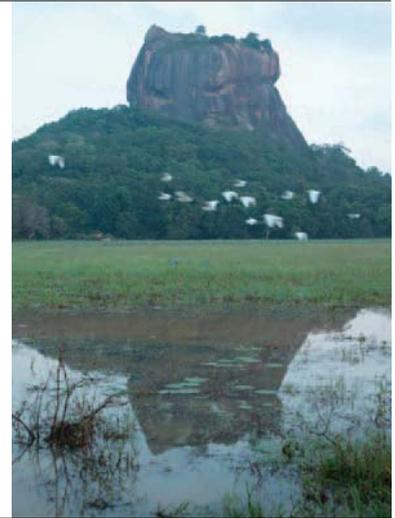
写真家。青年海外協力隊として活動後、西アフリカと北アフリカのサハラ縦断交易路の取材を中心に、アフリカ各地の人々と自然、文化と歴史を撮り続ける。写真集に『West Africa』。

Contents

02 春夏秋冬 祭りに刻まれた餓えの記憶 ガーナ

04 特集
観光開発
地域の宝を掘り起こせ

あの人気観光地にも日本の支援が！
地域力が向上する観光開発を
取り残された地域に光を グアテマラ
シーギリヤの魅力をも国の復興の力に スリランカ
官民の協力で観光立国の実現へ ガーナ
“生きた遺産”を地域の資源に ヨルダン
世界で生まれるMONO語り



18 ゲンバの風 藤田 昭雄 シニア海外ボランティア
20 地域と世界のきずな 「神の島」に生きる人々の知恵を途上国へ 広島県宮島
22 PLAYERS ランを守り山岳住民の生活を支える COSPA(パナマ野生ラン保護活動)

24 特別レポート
Qちゃんがケニアへ

～平和と自然環境保全のために一緒に走ろう～



26 ココロとココロ ～届け 私たちの思い～ ネパールの村にバイオガスと乳牛を アジアこども基金
28 JICA STAFF 石田 美帆 産業開発部 産業・貿易課
29 JICA UPDATE
30 イチオシ! 本・映画・イベント

31 地球ギャラリー
フィリピン
娘のために、
文字を覚えたい



40 MY ACTION クルム伊達 公子 プロテニスプレーヤー



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙 ©The Image Bank / Getty Images
遺跡の保存や修復などにJICAが協力したアンコール遺跡の一つ「アンコール・トム」。日本人にも人気の観光地だ。





08 バラの谷
BULGARIA

“バラの谷”と呼ばれる世界最大のローズオイル産地で、毎年「バラ祭り」を開催。中でもバラの女王コンテストは見どころの一つ。

- カザンラク地域振興計画プロジェクト
技術協力プロジェクト

観賞用バラの栽培促進のための技術支援や、観光産業の人材育成などを通じて、地域の観光振興を支援。

✈ 最寄りのカザンラクまで、ヨーロッパ経由で約20時間



06 アジャンタ・エローラ石窟群
INDIA

釈迦の転生物語を描いた壁画が有名なアジャンタ、壮大な彫刻建築が美しいエローラ両石窟群。共に世界遺産に指定されている。

- アジャンタ・エローラ遺跡保護・観光基盤整備事業I・II
円借款

両遺跡の保存・修復に加え、周辺地域の道路・上下水道・空港施設の整備や、植林などの自然環境保全活動を実施。

✈ 最寄りのアウランガバードまで、ニューデリー経由で約11時間



07 モルディブ
MALDIVES

青い海と白い砂浜を求め、世界中から人々が集まる代表的リゾート。約1,200の島々からなり、玄関口のマレ島では漁業が盛ん。

- マレ島護岸整備 無償資金協力

海面上昇による影響が危惧されるマレ島で護岸を整備。インドネシア・スマトラ島沖地震(2004年)の津波被害軽減に大きく貢献。

✈ モルディブまで、直行便で約10時間



04 大明宮含元殿竊跡
CHINA

唐の時代、西安に創建された雄大な宮殿遺跡。かつては遣唐使もここで皇帝に接見した。上海万博中国館でその一部が再現され、話題に。

- 大明宮含元殿遺跡保存環境整備計画
無償資金協力

貴重な竊址を風雨から保護する覆屋や、出土遺物や資料を展示する施設を整備。

✈ 西安まで、直行便で約5時間



05 アンコール遺跡
CAMBODIA

国旗にも描かれた巨大で壮麗な寺院遺跡が、訪れる者を圧倒する。クメール建築の最高傑作として名高い。

- シェムリアップ州及びアンコール遺跡公園地形図作成
開発調査
- シェムリアップ/アンコール地域持続的振興総合計画調査
開発調査
- シェムリアップ上水道整備計画 無償資金協力

日本は「アンコール遺跡救済国際会議」(1993年・東京)以来、遺跡の保存・修復活動に協力。JICAも遺跡の保存・修復や持続可能な観光開発のための地形図作成や開発計画策定などを支援。

✈ シェムリアップまで、韓国、ベトナム、タイ経由で約9時間



01 カンクン
MEXICO

ユカタン半島の先端にメキシコが国を挙げて開発した一大ビーチリゾート。周辺地域に点在するマヤ遺跡も観光客に人気。

- 観光促進投資戦略策定 開発調査

カンクンをはじめとするメキシコの長期的な観光戦略を策定するための調査を実施。

✈ カンクンまで、メキシコシティ経由で約14時間



09 ジェリコ市・ヨルダン渓谷地域
PALESTINE

石器時代の都市の跡や8世紀のイスラム王朝時代の宮殿遺跡など、文化遺産が豊富。ジェリコ市は世界最古の町とも称される。

- 官民連携による持続可能な観光振興プロジェクト
技術協力プロジェクト

行政や民間企業、住民による観光委員会を設立し、民芸品やアトラクションの開発、人材育成などに協力。

✈ パレスチナまで、アジア、ヨーロッパ経由で約17時間



11 キリマンジャロ山
TANZANIA

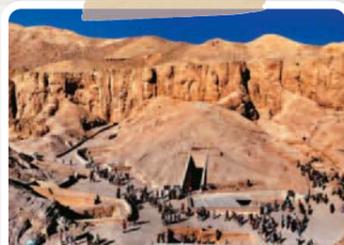
撮影：船尾修

標高5,895mのアフリカ大陸最高峰。頂上付近の美しい氷河や貴重な高山植物が、世界中の登山者をひきつける。

- アルーシャ〜ナマンガ〜アティ川間道路改良事業 円借款

ケニアの首都・ナイロビとキリマンジャロ国立公園の周辺地域をつなぐ道路を改良。観光客増加による地域経済活性化と地元住民の生活向上を図る。

✈ キリマンジャロ国際空港まで、ドバイ、ダルエスサラーム経由で約20時間



10 王家の谷
EGYPT

©AFLO

古代エジプトの王墓が点在するナイル川西岸の岩窟墓群。黄金のマスクで知られるツタンカーメンの墓は、1922年に発見された。

- 王家の谷周辺地区整備計画 無償資金協力

遺跡見学時の注意事項や王墓の修復状況などの情報を提供するビジターセンターを建設。保存・研究拠点としても機能。

✈ 最寄りのルクソールまで、カイロ経由で約14時間

特集 観光開発 地域の宝を掘り起こせ

あの人気観光地にも 日本の支援が！

歴史と文化、人類の英知、
日本も支援して
今日も世界各地で訪れ

大自然が生み出す驚きの景観一。
きたあの観光地が、
る者に感動を与えている。



02 イグアス国立公園
ARGENTINA

©(財)自然環境研究センター

落差約80mを誇るイグアスの滝と、多くの絶滅危惧種が生息する密林に囲まれた国立公園。その面積は550km²にも及ぶ。

- イグアス地域自然環境保全計画プロジェクト
技術協力プロジェクト

公園局職員の実務管理能力の向上と、地域住民への環境教育プログラムの普及を支援。

✈ イグアスまで、ブエノスアイレス経由で約28時間



03 フィジー
FIJI

撮影：今村健志朗

色とりどりのサンゴ礁が美しい海の楽園。マリンスポーツはもちろんのこと、国土の半分を占める豊かな熱帯雨林を巡るのも楽しい。

- ナンディ・ラウトカ地域上水道整備事業 円借款

観光需要の高まりを受け、拠点であるナンディ・ラウトカ地区の上水道施設を整備。

✈ フィジーまで、韓国経由で約13時間



©AFLO

発業者や旅行会社、ホテルチェーンなどの外部資本が主導的に開発を進める観光、つまりその地域から見ると「他律的観光開発」が主流だった。資本力や技術力のない開発途上国にとっては、特に観光開発の初期段階は外部の力に頼らざるを得ないケースが多いため、決して悪いことではない。しかし、従来のマスツーリズムに代表される他律的観光開発の中には、観光地となった地域住民の意思や地域資源の維持・保全への配慮が十分でないといった理由から、地域住民への裨益が限定的であったり、さらにいえば、環境問題などの負のインパクトが生じるという弊害が見られた。

こうした状況を踏まえJICAは、地域の人々がそれぞれの資源を使って持続可能な「自律的観光開発」を推進するための協力を展開している。例えば、①観光省や地方観光局などの公的機関、旅行会社やガイド組合といった国内の民間企業、地域住民に対して、観光分野に必要なノウハウを伝える人材育成、②その地域特有の手工芸・民芸品といった地場産品のみならず、地域の史跡名勝などの観光資源を生かした観光商品開発、③観光プロモーション・マーケティング能力とその実施体制の支援などを行っている。そうした協力を通じて、地域の人々の収入向上、雇用創出、社会的調和

特集 観光開発
地域の宝を掘り起せ



©Photodisc/Getty Images

地域力が 向上する 観光開発を

観光は、途上国にとって大きな可能性を秘めた産業だ。その恩恵が、地域住民にも行きわたり、地域全体の力を高めていくためのJICAの協力が今、各地で進められている。

の推進力の強化を図り、貧困削減にも貢献することを目指している。

国際社会においても、観光開発は「貧困削減の手段」ととらえられており、観光施設やインフラの整備といったハード中心の協力から、近年は文化・自然保全との両立を目指したツーリズム、人材育成、観光商品開発などソフト的な協力を含めた包括的な支援に移行してきている。

「その際に大切なのは、『公的機関』『民間』『地域住民』が三位一体となること」と浦野義人・JICAジュニア専門員は話す。つまり、観光振興に向けて三者が「対等に話し合い、情報共有を行える体制づくりが自律的観光開発のカギとなっているのだ。」

「初期段階では外部の力に頼らざるを得なくとも、JICAの協力で三者の能力が強化され、『どの段階で自律するか』を初期段階から三者が共有し、その目標に向かつて共に観光開発を推進することが重要です。」



日本の経験を生かして

今では島民の生活空間が観光資源となつて潤う沖縄県・竹富島も、かつては大型リゾート開発が計画され、一時は土地を売って外部資本に依存する道を進むか否かの選



途上国にとっての観光産業

夏休み真っただ中の8月。家族や友達同士で旅行に出かける人も多いだろう。世界には、魅力的な観光地がたくさんある。青い海が一望できるリゾート、大勢で楽しめるテーマパーク、広大で豊かな自然、何千年も前に築かれた歴史的建造物……。2009年、海外を旅した日本人は約1500万人、日本に旅行に来た外国人は670万人に上った^{※1}。

観光は、外貨獲得の有望な手段であること、ほかの産業への波及効果が高いこと、雇用吸収力が高いことなどから、開発途上国にとって「魅力あふれる産業」だ。また、すでにその地域にある文化や世界遺産、自然などを有効に生かすことで発展の可能性がある観光産業は、莫大な資金や人材の投資を必要とする工業と比べ、参入しやすい分野といえる。実際、後発開発途上国^{※2}では、観光による外貨収入がサービス貿易額の7割を占めており、観光産業が途上国に与える経済的なインパクトは、年々大きくなっている。



「他律的」から「自律的」へ

一般的にこれまでの「観光」は、観光開

沢に迫られた。しかし、他の島に比べて琉球時代の伝統的な建築物が多く残されていたこの土地の住民が選んだのは、島の文化的景観を生かした観光開発を進めることだった。そうして島民の生活レベルは徐々に改善され、1987年には国の「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されるまでに。「島の価値を初めて気付かせてくれたのは、全国の民芸資料を研究する学者だったそうです。こうした外部からの情報が地域の人々の「気付き」を生み、その価値を島民が評価・共有する」というプロセスを踏んだ結果、島の総意で文化的景観を資源とする観光を



©AFLO

※1 「日本政府観光局(JNTO)統計」より。
※2 途上国の中でも特に開発が遅れている国々。

取材協力：浦野義人・JICAジュニア専門員(観光開発)

「最近では団体の観光客がバスで訪れるようになりまし。以前はめったになかったことです。そう笑顔を見せるのは、道路周辺のある地域の住民。隣国エルサルバドルから北部ティカル遺跡などの人気観光地へ向かう観光客が途中で立ち寄るようになったという。きっかけは、CATが中心となり、町の見ど

コミュニティマップで町の魅力を整理

具体的には、潜在的な観光資源を有効活用し、地域を発展させるための知識やノウハウを対象地域内17のCATに指導。また、CATが地域住民に対して行う研修の実施・運営を支援しているほか、将来的にCATが自ら効果的な観光開発を進めていけるよう、体制強化や人材育成にも力を入れている。

Aは、3つの県にまたがるこの地域一帯の観光促進を図るため、2007年から「観光自治管理委員会強化プロジェクト」を実施。観光産業にかかわるアクター（企業、NGO、住民など）の連携を促し、各地の観光開発を主導する「観光自治管理委員会（CAT）」の能力向上を目指している。



09年11月には、CATの代表者や住民の代表者らが観光開発の先進事例を学ぶJICAの第三国研修が、メキシコで行われた。研修中は、現地でグアテマラのプロモーションも実施した

「この地域の観光産業を活性化させ、いつの日か、魅力ある観光回廊」として発展させていきたい」と話す。

「この国では、2人に1人が1日2ドル以下※の生活を送り、特に農村部では7割以上が貧困状態にある。そのため、地域経済を活性化させ、住民の生活向上

「この地域の観光産業を活性化させ、いつの日か、魅力ある観光回廊」として発展させていきたい」と話す。

「この地域の観光産業を活性化させ、いつの日か、魅力ある観光回廊」として発展させていきたい」と話す。

「この地域の観光産業を活性化させ、いつの日か、魅力ある観光回廊」として発展させていきたい」と話す。



「食」の面でも観光客をひきつけようと、調理技術や盛り付け、伝統食材を使った料理などについて学ぶセミナーも実施



豊かな生態系に恵まれた自然保護区では、石川晴久・JICA専門家(中央)のアドバイスの下、この一帯に生息する花の種類を観光客に紹介する看板も設置された

※「2006年国立統計院全国生活実態調査」より。

取り残された地域に光を

マヤの遺跡に代表される魅力的な観光資源に支えられ、グアテマラで成長を続ける観光産業。だがその裏では、地域経済の活性化や人々の生活向上につながる観光振興の必要性が高まっている。JICAは、人気観光地の“谷間”となってしまった地域で、観光開発を進めていくための支援を行っている。



世界遺産のコロニアル都市・アンティグアは、石畳とバステルカラーの家々が続く美しい町並みが観光客に人気。背後のアグア火山は、標高3,700メートル以上を誇る

「森の国」を意味するグアテマラ。その名の通り、深い緑の森と山に覆われたこの国では、紀元前3世紀から1200年以上にわたり、マヤ文明が隆盛を極めた。現在も、熱帯ジャングルの中にそびえ立つ遺跡が当時の栄華をしのばせる。

生活向上の手段として

中南部のコロニアル都市・アンティグアから、最大のマヤ遺跡である北部のティカル遺跡まで約250キロ。この二つの世界遺産を南北に結ぶ道路の周辺地域も、人気観光地の谷間の一つ。アンティグアからティカル遺跡への移動には多くの人が飛行機を使い、仮に陸路を通ってもこの地域に立ち寄る観光客は少ない。



トウモロコシの葉を使った人形を売る女性。こうした手作りの民芸品は、農村部の人々にとって貴重な収入源だ



(上)博物館の展示の維持管理について指導する
永金宏文・JICA専門家
(中)「シーギリヤのわな」をテーマにした展示。シー
ギリヤ地方に伝わる、焼き畑を動物による被害から
守るために仕掛けられる「わな」を再現した
(下)博物館のロビーに、自分たちが描いた絵が飾ら
れているのをうれしそうに眺める子どもたち

「来て、見て、楽しい」施設を目指
「コンセプトは、参加型」の博
物館です」とチーフアドバイザー
の土井章・JICA専門家。

後半、巨大な岩の頂上に築き上
げられた王宮の遺跡。古代の画
家によって描かれた壁画なども
残っており、その神秘的な魅力
は、訪れた者のみを感じるこ
とのできる特権だ。

し、来館者が参加できる特別展
示やイベントなどを積極的に実
施していく。その第一弾として、
開館式では地域の子どもたちを
対象に絵画コンテストを開催。
後日、彼らの作品、開会式の写真
などの展示も行った。「パネルの
製作から空間の使い方で、博
物館のスタッフと一緒に考えた
最初の試みです」と土井さん。外
国人だけでなく、都市部で暮ら
す国内観光客にもシーギリヤ周
辺の文化を伝えたいと、地域博
物館ならではの企画を模索して
いる。

現在、博物館の来館者数は、シ
ーギリヤロックを訪れる人の約
3割。館内にインフォメーショ
ンセンターを設置するなど、ダ
ンブッラ地区の観光拠点として
の役割も強化していく計画が進
められている。

観光協会が中心となり 地域振興を図る

「観光振興は、まちづくりの一
環でもある」と土井さんは強調
する。「ですから、その担い手と
なるのは、地域の住民自身な
んです」。そこでプロジェクトが
立ち上げたのが「ダンブッラ・シ
ーギリヤ観光振興協会（ADSTP）」。日本の観光協会をモデ
ルに、ホテルやゲストハウス、女
性グループなどが集まり、地域
全体の観光振興・マーケティング
を協働で行うための組織だ。

「白川郷案内の会」の上手重一さんから、
白川郷の歴史、保存運動、景観保存のため
の住民の活動などについて説明を受ける
スリランカの研修員たち



自然と一体化した造りになっているシーギリヤ博物館。館内にはスロープも設置され、障がい
者の訪問にも考慮されている(撮影:久野真一)

シーギリヤの魅力 を 国の復興の力に

四半世紀にわたる内戦が終結し、
今、復興の真ただちにあるスリランカ。
そのツールの一つに考えられているのが、
地域の資源を生かした「観光」だ。
島の中心部、2つの世界遺産を有するダンブッラ地区では、
JICAの支援により観光振興が進められている。



2つの奇跡 世界遺産の恵みを生かして

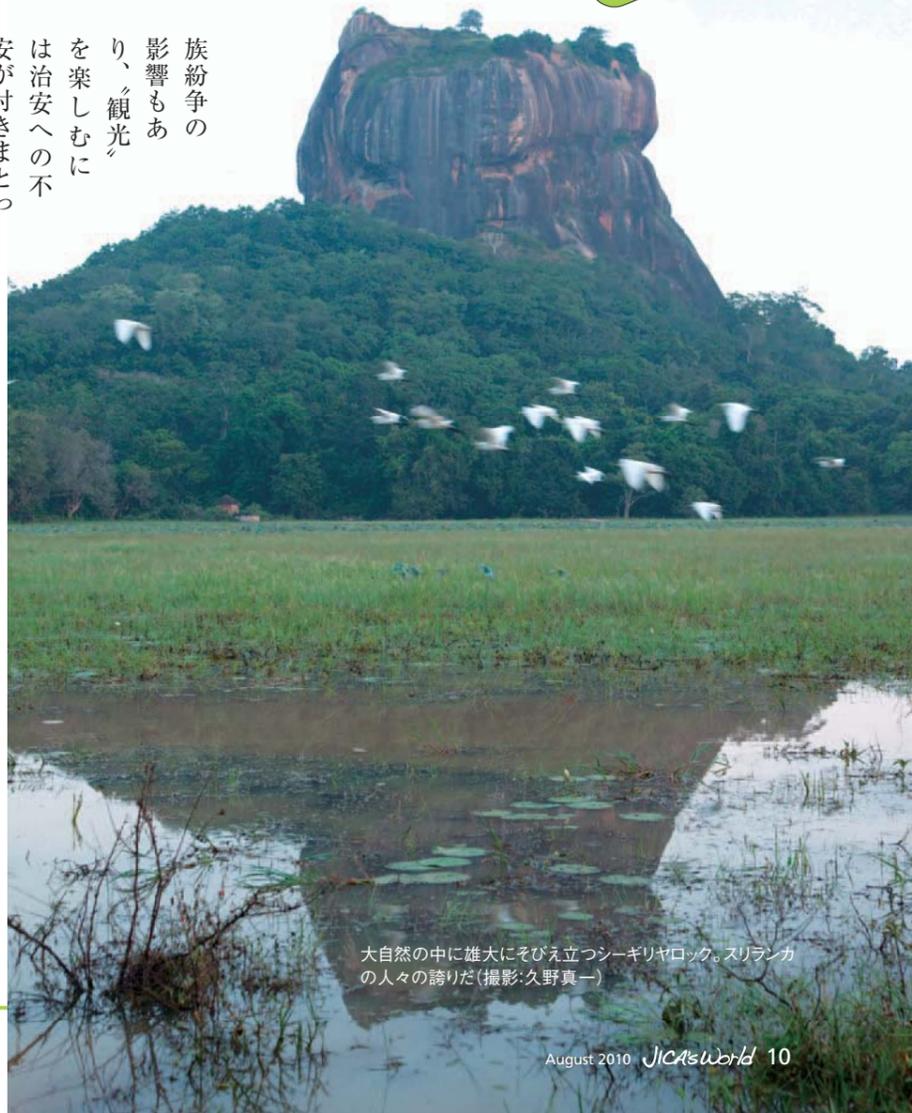
日本から飛行機で約9時間、
インド洋に「光輝く島」と呼ばれ
る国がある。
「スリランカ」―紅茶の生産
地として、耳にしたことがある
人も多いかもしれない。近隣に
あるのは、バックパッカーの聖
地として名高いインドや、世界
的なリゾート地として知られる
モルディブ。しかし、これらの国
に行ったことがあっても、スリ
ランカを旅したことがある人
は、果たしてどのくらいいるだ
ろうか。

2009年5月まで続いた民

族紛争の
影響もあ
り、観光
を楽しむに
は治安への不
安が付きまとい
ていたこの国。し

かし、北海道の面積にも満たな
い国土は、美しい海と緑に囲ま
れ、7つもの世界遺産に恵まれ
ている。この魅力を世界に伝え、
国の発展の糧としたい。紛争
が終結した今、政府は「観光」を
国家政策の一つに掲げ、各地域
でその可能性を探ってきた。

豊かな湖や仏教遺跡、マーケッ
トなど、実に個性豊かな要素が
散りばめられている。JICA
もこれらを観光資源として生か
し、まちづくりを進めるべく、地
域の人たちと共に、観光振興の
取り組みを進めている。
中でも、ジャングルの中にそ
びえ立つ巨大な岩山「シーギリ
ヤロック」は、観光の目玉として
大きく期待されている。5世紀



大自然の中に雄大にそびえ立つシーギリヤロック。スリランカ
の人々の誇りだ(撮影:久野真一)

関係者が一堂に会し、観光振興のために何をすべきかを話し合い、計画を立て、実行していくための「仕組み」をつくらうと、JICAは06年から「観光振興支援プロジェクト」を実施。観光省をはじめとする「官」と、旅行代理店、ホテル経営者、バス会社など観光産業に関連するさ



アクラ市内に軒を連ねる土産物屋。商品の品質や種類などに、まだまだ改善の余地がある

「アクワバー(ようこそ!)」
ガーナを訪れる者の多くは、人々の盛大な歓迎ぶりとその満面の笑みに、心を揺さぶられるという。特に、縁あって再びこの国に戻った外国人は、まるでふるさとに帰ってきたかのごとく迎えられる。ガーナの魅力の一つとして訪問者が口をそろえて絶賛する、人々の優しさや温かさを象徴するかのようだ。

そんな彼らの人間性とも決して無関係ではないだろう。近年、ガーナを訪れる人々は増え続けている。1990年には14万人ほどだった海外からの訪問者数は、2006年には約50万人を記録。政治や経済の安定にも後押しされ、観光業は、世界有数の産出量を誇るカカオ、金に次ぎ、第三の外貨獲得源となるまでに成長した。欧米からのバックパッカーや、ナイジェリアなど周辺国からの旅行者が増加してい

「官」と「民」が出会う場を
ガーナを観光立国に。90年代後半より、政府は国家開発戦略の重点分野の一つに観光を掲げ、観光省が中心となってさまざまな政策を打ち出してきた。しかし、観光振興を進めていく上で重要な民間部門との連携や支援策が十分ではなく、その成果は思うように上がらなかったという。

まさまな「民」の関係者で構成される「官民パートナーシップフォーラム(PPPフォーラム)」の設立を支援し、年4回の会議を柱に、官民が共同で取り組むさまざまなパイロット事業を行ってきた。JICA専門家としてプロジェクトに携わった株式会社パデコの下村剛史さんは、「最初は、なぜ連携が重要なかを認識してもらったことから始めなければなりません」と振り返る。だが時期を遡うごとに、フォーラムで得られる知識や情報、そこで生まれる人と人とのつながりなどが評価され、その規模も拡大していった。また、パイロ

ト事業の成果として、海外で観光広報などを行う「ガーナ観光局」の設立に向けた準備が進められているほか、民間の人材育成のための研修カリキュラムも整備。さらに、海外での広報映像やキャンペーンロゴも製作され、広報ウェブサイトも開発された。

JICAの支援は09年に終了したが、その後もフォーラムでは、「マーケティング」、「商品開発」、「投資促進」などの観点から観光振興を考え、形にしている。また、旅行者にさまざまな観光情報を提供する「アクラ・ビジターセンター」の建設も予定されるなど、引き続き成果も期待できそうだ。一方JICAも、08年「第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)」で日本が観光促進支援を表明したことを受け、アフリカ各国での協力の可能性について検討を始めている。

「アクワバー」が聞かれるに違いない。底抜けに明るく、ホスピタリティーあふれるこの国の人々を見ると、そう思ってくる。

た問題も多い。すでに人気の高い観光地以外に、看板となる観光資源が十分でない上、観光客にサービスを提供する民間部門も規模が小さく脆弱だ。例えば、一部の外資系高級ホテルを除けば、宿泊先の予約が理由なくキャンセルされたり、フロント係が宿泊費を計算できなかったり、というのはよく聞く話。それ以外にも、「人材」、「宣伝・プロモーション」、「投資」など、足りないものはたくさんある。

「アクワバー(ようこそ!)」
ガーナを訪れる者が増え続けている。1990年には14万人ほどだった海外からの訪問者数は、2006年には約50万人を記録。政治や経済の安定にも後押しされ、観光業は、世界有数の産出量を誇るカカオ、金に次ぎ、第三の外貨獲得源となるまでに成長した。欧米からのバックパッカーや、ナイジェリアなど周辺国からの旅行者が増加してい

るほか、最近では自らのルーツを求めて巡礼旅行をするアフリカ系欧米人の姿も目立つ。目玉となる観光地は、かつて奴隷貿易の拠点となった南部海岸沿いの要塞、17世紀から栄えた王国の伝統的建築物群といった世界遺産、そして貴重な野生生物が数多く生息する野生保護区など。また、外国人旅行者向けの高級リゾートも好調だ。だがそうした観光産業が拡大する一方で、明らかにな

「アクワバー」が聞かれるに違いない。底抜けに明るく、ホスピタリティーあふれるこの国の人々を見ると、そう思ってくる。

「アクワバー」が聞かれるに違いない。底抜けに明るく、ホスピタリティーあふれるこの国の人々を見ると、そう思ってくる。

「アクワバー」が聞かれるに違いない。底抜けに明るく、ホスピタリティーあふれるこの国の人々を見ると、そう思ってくる。

「アクワバー」が聞かれるに違いない。底抜けに明るく、ホスピタリティーあふれるこの国の人々を見ると、そう思ってくる。

「アクワバー」が聞かれるに違いない。底抜けに明るく、ホスピタリティーあふれるこの国の人々を見ると、そう思ってくる。

「アクワバー」が聞かれるに違いない。底抜けに明るく、ホスピタリティーあふれるこの国の人々を見ると、そう思ってくる。



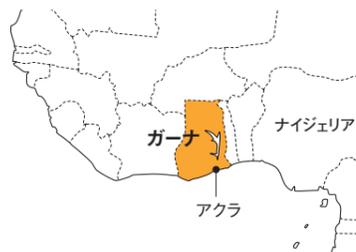
撮影:今村健志朗



南部の海岸沿いにある、かつて奴隷貿易の拠点となった要塞、エルミナ城(上)とケープ・コースト城(下)。共に世界遺産に指定されているが、さらに観光地として整備を進める必要がある

官民の協力で 観光立国の実現へ

観光を国の重点開発分野の一つに掲げているガーナ。そのカギとなる、政府と民間の協力による観光振興。JICAはこの仕組みづくりを支援している。



PPPフォーラムの活動をもとに作られた広報ウェブサイト。観光省によって管理され、官民双方のさまざまな意見が取り入れられている

<http://www.touringghana.com/>



08年には、サッカーのアフリカネイションズカップがガーナで開催され、他国からの訪問者への観光プロモーションも行われた

エコミュージアムとは、町中にある「リビング heritage」(生きた遺産)を観光資源として活用し、町全体を博物館に見立てるといふ発想。つまり、サルト市内にある建物、樹木、道、さらには地域の人までがその資源になりうるのだ。「サルトはもとも商人の町ということもあり、ホスピタリティーにあふれています。個性的なイスラム建築やスーク(マーケット)など、地域の人にとっては、当たり前にあるものに実は魅力があるんです。ヨルダン人の「心」や「文化」のル

ーツを示す舞台としては、最適な観光地だと確信しています」(西山先生)。
エコミュージアムの実現に向けて、08〜2010年、JICAは青年海外協力隊で構成された調査チームを派遣。エコミュージアムの全体計画を立てた上で、まずはサルトの風情ある町並みを構成する「建築物」に注目し、自ら町を歩いて、建築年代や敷地面積、素材、装飾など、さまざまな角度からデータを収集した。「壁に建築された年代が刻まれている、サルト石と呼ばれる地域特有の黄色の石灰岩が使われていたり、観光資源としてアピールできる、歴史的な建築物がたくさんあることが分かりました」と調査メンバーの村上佳代さん。サルトに昔から伝わる話などを聞くために、町の歴史に詳しい「古老」と呼ばれる人々にも話を聞いたという。



地元の子どもたちを対象にお菓子の家を作るイベントを実施。ウェハースやチョコレートなどを積み上げ、サルトの伝統建築を模したケーキを作った。サルトの伝統建築や歴史について、興味を持って勉強してもらおうのが狙い

訪問先の民家では最初、「何のために？」という顔をされることも多かった。しかしその度に、隊員たちはサルトの歴史的価値、エコミュージアムの説明を続けた。サルトの町の魅力を伝えたい。目指すものは極めてシンプルだ。「そのうち私たち隊員の存在が広まっていくって、朝

を続けていく方針だ。「煙の出ない、つまり環境に優しいエコミュージアムが、観光分野で果たす役割は非常に大きい」と西山先生。「途上国が自律的發展に向け、自国に誇りを持つて取り組める最適なアプローチでもあります」。

町を守りながら、自分たちの文化を観光資源として生かしていく。サルトのエコミュージアムが、途上国の「町の観光モデルになることを期待したい」。

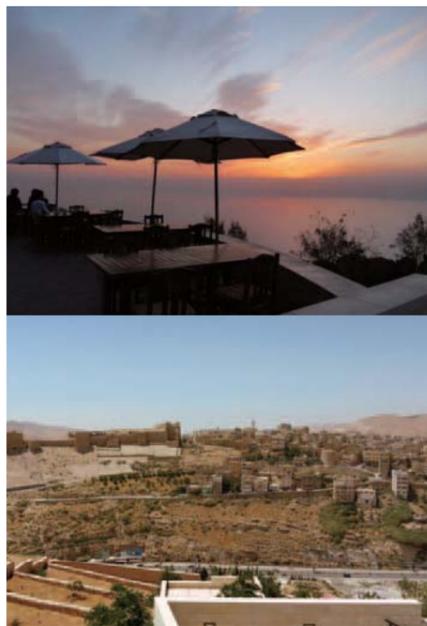
サルトにある建築物を一軒一軒調査。「町を歩けば歩くほど、さまざまな魅力が見えてきました。教育、歴史、宗教などでカテゴリー分けして、観光プランを作っていければ」(村上さん)



エコミュージアムで環境にも配慮

歴史資料館のオープンを間近に控えるサルトでは、さらなる観光の可能性を探るべく「サルト・エコミュージアム」の計画が進められている。首都から車で約30分、3つの小高い丘に囲まれた町並みが美しく、どこかふるさとに帰って来たような懐かしささえ感じる。特に大きな観光資源がある訳ではないが「ポテンシャルにあふれた町」であると、JICAのサルト観光開発に協力する北海道大学観光学高等研究センターの西山徳明教授は言う。

エコミュージアムの実現に向けて、08〜2010年、JICAは青年海外協力隊で構成された調査チームを派遣。エコミュージアムの全体計画を立てた上で、まずはサルトの風情ある町並みを構成する「建築物」に注目し、自ら町を歩いて、建築年代や敷地面積、素材、装飾など、さまざまな角度からデータを収集した。「壁に建築された年代が刻まれている、サルト石と呼ばれる地域特有の黄色の石灰岩が使われていたり、観光資源としてアピールできる、歴史的な建築物がたくさんあることが分かりました」と調査メンバーの村上佳代さん。サルトに昔から伝わる話などを聞くために、町の歴史に詳しい「古老」と呼ばれる人々にも話を聞いたという。



(上)死海博物館に併設される展望台レストラン。遠くバレスチナを望み、地元の人にも親しまれている(下)展望台から見るカラク城。誰もが圧倒される存在感を持つ

丘に囲まれたサルトの町並み。「日本でいう京都。外国人観光客に推薦したい場所です」(西山先生)

「観光」を国の産業の柱に
ヨルダンに「マンサフ」と呼ばれる伝統料理がある。羊を丸ごと煮込み、各家庭に伝わる味付けで仕上げる。お祝い事や客をもてなす時には欠かせない一品だ。ヨーロッパなどに比べて、日本からの観光客がまだ少ない中東地域。観光ガイドブックには載っていない、こうした人情味あふれた食文化があることは、残念ながらあまり知られていない。

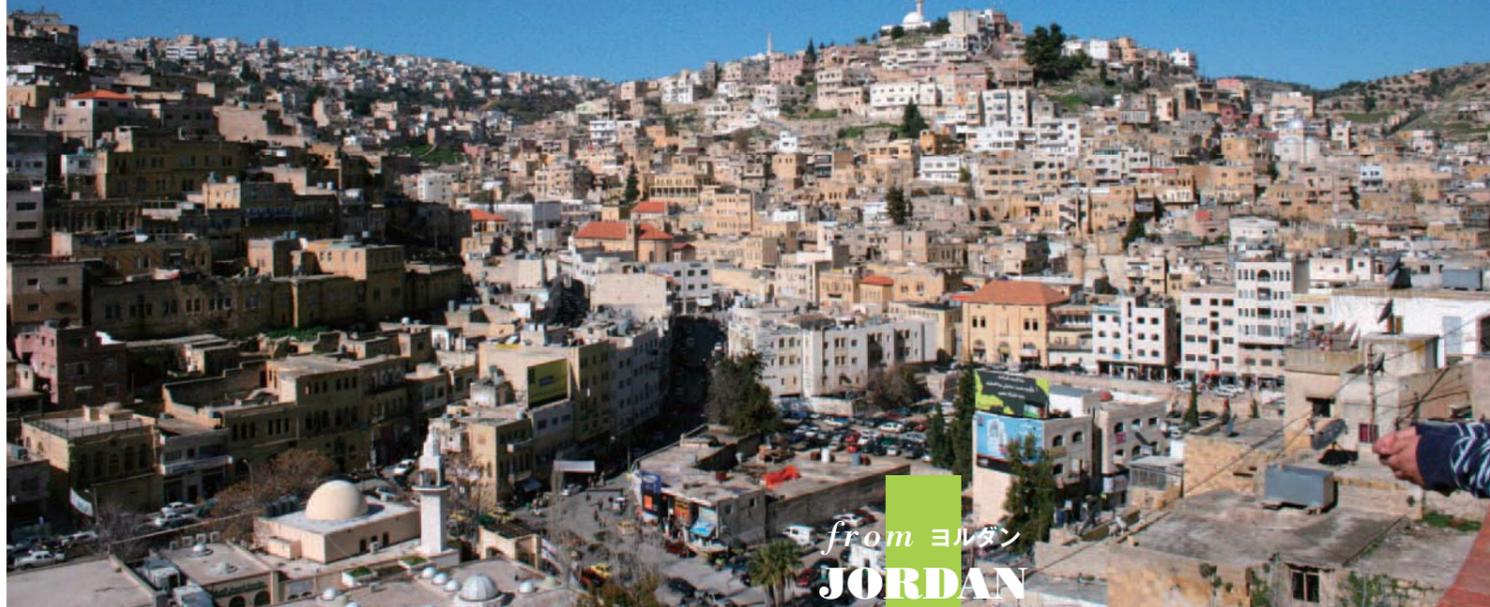
しかし今、ヨルダンでは観光産業に対する可能性が高まっている。死海や世界遺産のペトラ遺跡、映画「アラビアのロレンス」の舞台にもなったワディラム砂漠だけでなく、さまざまな時代を象徴する遺跡や建築物は、私たちが歴史の教科書のよような世界に導いてくれる。実際、欧米諸国を中心に観光客は年々増加。観光産業は、貿易外収支の2割を占めている。

JICAも早くからこの可能性に注目し、1994年にヨルダン全土を対象に観光開発のための調査を開始。調査結果に基づき、99年からは円借款により、首都アンマン、死海、カラク、サルトの4地域を対象に、観光ゾーンや博物館などの整備を行ってきた。さらに2004〜07年には、「博物館活動を通じた観光振興プロジェクト」を実施。円借款で整備した4つの博物館を対象に、自立的運営に向けた能力強化を行った。

すでに開館しているカラク考古博物館と死海博物館では、カラク城や死海など、観光名所についての知識を深めることができる。と評判で、新たな観光スポットとして定着しつつある。

“生きた遺産”を地域の資源に

今、新たな観光地として注目が集まっている中東。特に、死海やペトラ遺跡など、豊富な観光資源に恵まれているヨルダンでは、さらなる経済発展のため、観光産業に対する期待が高まっている。JICAもその可能性に注目し、ソフトとハードを組み合わせた包括的な支援を行っている。

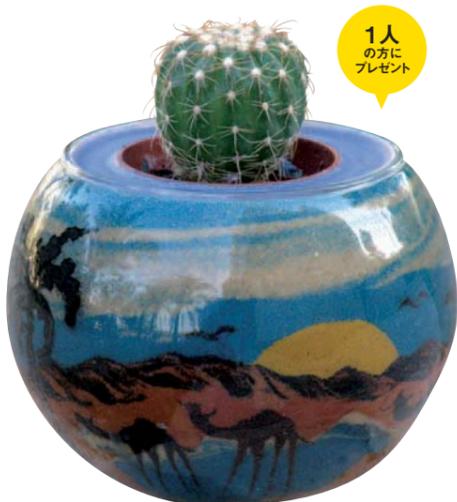




パレスチナ ガラス瓶の砂絵

「官民連携による持続可能な観光振興プロジェクト」では、毎週末、ジェリコ市内でバザールを開いている。多数のお土産物屋が出店しているが、中でも、砂絵職人のジャマルさんの作品が人気。ガラスの瓶にカラフルな砂を入れ、ラクダや砂漠などの絵を描く彼のブースには、いつも人だかりができています。プロジェクトでは、商品の陳列や接客についても工夫を凝らす。

※ジェリコ市内のバザールや国内の観光地で購入可能(サボテン付きはバザール限定)。



1人の方にプレゼント



4人の方にプレゼント



タンザニア バニラティー

ウルグル山脈の山間にあるモロゴロ県ムクニ郡で、青年海外協力隊が3代にわたって地元の人たちとバニラの栽培に挑戦。開花まで少なくとも3年は要する栽培、人工受粉に根気強く取り組んだ結果、見事収穫に成功。地元の紅茶・コーヒー製造会社と農民グループが協働で商品化した。芳醇なバニラの香りは、農民たちの地道な加工作業のたまものだ。

※NGOわかちあいプロジェクト(www.wakachiai.com/)を通じて日本でも購入可能。

特集
観光開発
地域の宝を掘り起こせ

世界で生まれるMONO語り

観光地に行くと、必ず買って帰るのがお土産。その土地でしか買えない、珍しい品物を探すのが、旅の楽しみという人も多いのではないだろうか。ここでは、JICAの支援により開発されたMONOの一部を紹介。

カンボジア カンボジアンペッパー

日本の旅行ガイドブックにも掲載されている「Cambodian Pepper」。コショウが入っている巾着袋は、実は青年海外協力隊の指導を受けてカンボット技能専門校の訓練生が製作したもの。カンボジアの植物・果物の皮を使って染められた布を、ミシンで縫い合わせていく。天然染料ならではの温かみある色合いが特徴で、おしゃれな小物入れとしても利用できる。

※プノンペン市内にある「KURATA PEPPER」の店舗で購入可能。



8人の方にプレゼント

マラウイ はちみつ

「一村一品運動のための制度構築と人材育成プロジェクト」で生まれた製品のひとつ。地域活性化のため、低コストで収入が得られる「養蜂」に注目し、南部のムランジェ県の住民たちがマラウイ政府とJICAの支援を受けて生産をスタート。ミネラルなどの栄養素が高く、濃厚な味が特徴。国内のマーケットやスーパーなどで手軽に購入でき、健康志向の地元の人にも人気。

※オフィス五タラント(www.malawi.jp/)を通じて日本でも購入可能。



3人の方にプレゼント



1人の方にプレゼント



1人の方にプレゼント



3人の方にプレゼント



1人の方にプレゼント



2人の方にプレゼント

8人の方にプレゼント

1人の方にプレゼント



グアテマラ 伝統工芸品

「グアテマラ観光自治管理委員会強化プロジェクト」を通じて、地域の伝統産品を活用した観光開発が進行中。JICAの協力の下、品質や生産技術向上のための研修、マーケティング支援などが進められている。トウモロコシ人形、モロ細工、木工細工など、各地域の素材で作られた商品が、その土地の魅力を観光客に伝える手段にもなっている。(8ページに関連記事)

※各村のマーケットで購入可能。

スリランカ サリー布のバッグ&シュシュ

2つの世界遺産を有するダンブッラ地区で、地元の女性たちによるお土産物開発が進行中。青年海外協力隊と共に、民族衣装として知られるサリーの布を再利用し、ハンドバッグや髪飾りの製作が進められている。異国情緒あふれる柄は、スリランカ独特の味わい。ダンブッラ地区だけでなく、首都コロンボのマーケティング開拓にも取り組んでいく予定。(12ページに関連記事)

※ダンブッラ地区のマーケットなどで購入可能。



キルギス SAORI織り

中部ナリン州のコミュニティー開発に取り組む青年海外協力隊が、自由な発想で色を重ねていく日本で生まれた「さりを織り」の技術を導入。村の女性たちにより「地域組合SAORI」が発足し、8人のメンバーが中心となって製作に励んでいる。ハンドバッグやブックカバー、化粧ポーチやペンケースなど、商品の種類はさまざま。地元の羊毛を使った草木染めによる製品開発にも取り組む。

※首都ビシケク2店舗のほか、3都市の店舗で購入可能。



**旅行ガイドブックの
編集者からボランティアに**

平らで坂の少ないラオスの首都ビエンチャンの町中を、自転車ですイスイ走る日本人。こんがり日焼けした肌は、思わずラオス人と間違えそうになるくらい、現地になじんでいる。軽やかに自転車から降りて来たのは、シニア海外ボランティアの藤田昭雄さん。2008年1月から、日本マナーケットを対象に観光振興に取り組んでいる。実は彼にとって、ラオスは二つ目の派遣国。ここに来る前は、アルゼンチンのパタゴニアで活動していた。そう聞くと、国際協力一色の人生のようだが、「数年前まで、シニア海外ボランティアの存在すら知らなかったんですよ」と笑う。

会社員時代は、30年間、観光関係の書籍を制作していた藤田さん。「実は、経済記者を目指して入社したんです。旅行が特別好きという訳でもなかったんですが、いつの間にかこの仕事をしていました」。旅行業界の先駆けとなる、旅行ガイドブックの立役者としても貢献した。

「旅行ガイドブックのプロデューサー」として生きてきた藤田さんに、転職が訪れたのは退職後。「都会での多忙な生活を終わりにして、健康的な生活を送りたい」と現場を離れて2年、電車である中吊り広告が目が止まった。シニア海外ボランティア。「こんな制度があ



「第一回ナムグム・ファンライド」のスタート地点の様子。企画者の一人である藤田さんも参加したが「田園風景を楽しんで走っているうちに、最後尾になってしまいました」

あったのか。何か心に響くものがあった。「特に技術はなかったのですが、少し知識のある、観光なら何かできるのではないかと」。すぐに応募を決意し、アルゼンチンに派遣されることになった。

藤田さんが配属されたのは、パタゴニア観光振興機構。ペリトモレノ氷河などで知られるパタゴニアに、日本人観光客を誘致するためのマーケティングを任された。「森や湖、氷河、海岸など、日本の3倍はある広大な土地に名所が点在しています。観光地としてアピールするには、その土地を『面』でとらえなければなりません。それが非常に困難でした」。

となると、日本からの移動距離は果てしない。観光客を呼び込むには工夫が必要だ。日本の知り合いを頼って、パタゴニアの特集を組んでもらえないかと売り込んでみた。しかし、出版業界は不況の真っただ中。「関心を示してくれた人もいきましたが、最終的な答えは厳しいものでした」。旅行関係のブログやガイドブックに情報を発信したり、現地のウェブサイトの日本語版を作成したりと努力を続けたが、「一年の任期では、思うような成果を上げることはできませんでした」。

**ラオスで学んだ
レスポンスブル・ツーリズム**

帰国して1年が経ち、心の底に引っ掛かっていた何かが、藤田さんを再び国際協力の世界に呼び戻した。同じくシニア海外ボランティアとして、東南アジアのラオスに派遣されることになったのだ。「南米よりも過酷なイメージがあったので少し不安でした。でも、未知なる国へ行くという、楽しみの方が強かったかもしれません」。

アルゼンチンにいた時は、「観光振興の支援」とは何か、よく分かっていた。藤田さんと藤田さん。そんな彼に道を示してくれたのが、ラオス旅行業協会が働いている欧米人の同僚だった。「彼らから教えてもらった『レスポンスブル・ツーリズム』という考え。単にたくさん観光客を誘致するのではなく、その土地の環境・文化に配慮しな



アルゼンチンの有名観光地の一つ、ロス・グランシアレス国立公園の観光局出張所を視察する藤田さん。観光客用に置かれている地図や資料を集め、日本人にアピールするためのアイデアを探した

シニア海外ボランティア
Fujita Akio
藤田 昭雄さん

から魅力を伝え、理解してもらおう方法を考えることが大切なんだと気付きました」。

これをきっかけに、藤田さんの活動の幅は広がっていった。現地の旅行関係者との勉強会、ボランティアやスタディーツアーのサポート、日本語ガイド養成講座の新設、ラオス旅行ガイドの日本語版作成…。地方の伝統的な祭りを取材し、日本の旅行者に記事を提供したりもした。「日本人である私がなぜ途上国で観光振興を行うのか。現地の人に、観光がどう裨益するのか。常にそれを念頭に置いていきます」。

そして今年2月、藤田さんの活動の集大成となる「第一回ナムグム・ファンライド」が開催された。「ビエンチャンは道が平たんで、サイクリングに最適なんです。ラオスの自然に触れながら、サイクリングを楽しむ。自転車は車と違って環境にも優しい。日本人の仲間と話していて、これだ!!と思えました」。現地で発行している日本語フリーペーパーの編集長をサポートしながらラオス・サイクリング連盟などに企画を持ち込み、1年以上かけて準備。ラオス人、日本人、欧米人など70人近くが参加し、イベントは大盛況に終わった。「毎年続いていくように工夫を重ねたい」と意気込む。

藤田さんが大切にしているのは、目標に行き着くまでのプロセス。「私たちボランティアができることは限られています。たとえ大河の一滴だったとし

ふじた・あきお
1946年神奈川県出身。民間の出版社で旅行ガイドブックの制作に携わる。退職後、シニア海外ボランティアに参加。アルゼンチン(2005年11月~06年11月)、ラオス(2008年1月~10年1月)で、日本人観光客を誘致するための観光振興に携わる。



在京ラオス大使館で行われた「ラオス旅行フォーラム」に出張。日本の旅行関係者に対し、日本アセアンセンター総長、ラオス大使、観光大臣と共に、藤田さん(右端)もラオスの観光の魅力のアピールした



パタゴニア最大の観光資源「ペリトモレノ氷河」。地球温暖化の影響で崩壊が進んでいる



ても、懸命にやっている姿が、現地の人に残るような活動をしたかったので」。

いつの間にか、ラオスのとりこになってしまった藤田さん。「何だか肌合いうみなんなんです。もっと住んでいたいくらいです」と目を細める。「残りの人生は、国際協力に捧げたい」。そう言い切る彼の瞳の向こうに、静かな熱い思いが見えた。

「知られざる魅力を日本人に広めたい」

第二の人生は、暖かい場所で、人の役に立ちながら過ごしたい。そんな思いから、シニア海外ボランティアに応募した藤田昭雄さん。自身がひきつけられた途上国の魅力を日本人観光客に伝えるべく、「地球に優しい」観光の在り方を模索している。

第17回
ゲンバの風





広島県

宮島

広島県宮島

面積30.39平方キロ。人口約1,800人。広島湾の最西端、広島県廿日市市に位置する日本三景の一つ。江戸時代から瀬戸内海の交易都市、商業都市としてにぎわう。1996年、広島市内の原爆ドームとともに、厳島神社と周辺の景観が世界遺産に登録された。もみじ饅頭や杓子が有名。観光客は年間約350万人、うち外国人は約10万人。外国人観光客が多いため、地元の小中学校では国際理解教育も盛ん。

々の知恵を途上国へ

「神の島」として、古くから人々に崇められてきた宮島。日本三景の一つでもあり、国内のみならず、世界的な観光地としても有名だ。長年にわたり、地域の人々によって支えられてきた宮島の「観光」は、途上国の観光振興のヒントにもなっている。

【広島県】

宮島



宮島のシンボル「厳島神社」を見学する観光客。干潮時には歩いて渡れる大鳥居は世界的にも有名で、外国人観光客も多い

「神の島」に生きる人



パークボランティアと島内を視察する研修員たち。観光地でありながら、地域の人々の努力により守られた空間を目の当たりにし感動していた



宮島伝統産業会館では、もみじ饅頭作りを体験。観光客が参加できるアクティビティが増えることで、滞在時間も長くなる

上、島の観光を支えてきたキーパーソンだ。島内の建物の建設や木の伐採についても、さまざまな規制が設けられているという。宮島は、四季によってさまざまな楽しみ方ができる。水中花火大会やかき(牡蠣)祭り、清盛まつりなど、季節の魅力伝えるための行事が開催されており、毎年心待ちにしているファンも多い。

宮島の観光ノウハウを学ぶ

観光のモデルケースともいえる宮島は、JICAの研修「持続可能な地域観光振興」の舞台にもなっている。開発途上国の省庁や自治体、NGOなどで観光開発に携わる人を対象に、15年も続いている老舗コースだ。

第一回目からコースリーダーを務める、広島大学大学院社会科学研究科の戸田常一教授によると、「アジア、アフリカ、中南米、中東など、世界各地から研修員を受け入れているのですが、それ故に、彼らが抱える問題も幅広い。世界遺産保護や地域ボランティア育成など、宮島には、観光についての包括的に学べる要素がそろっているのです。かつては他の観光地でも行われてきた研修を、宮島を中心としたプログラムに切り替えた。

毎年、最初に研修員たちが取り組むのは、自分たちの足を使って、宮島について知ること。地元のパークボランティア*の説明を受けながら、

島の文化や人々に触れ、地域の資源の生かし方を肌で感じる。その上で、観光協会、土産物屋、地域の人々、観光客などを対象に、「若者の観光活動への参加」「環境」「地域住民を巻き込んだ体験型観光」など、テーマに基づいて話を聞く。

「宮島の問題は、地域の観光振興が抱えるものとして、彼ら自身の国とも重なるはず。この分野で生じうるさまざまな課題について、あらゆる視点から考えてもらうことが目的です」(戸田先生)

昨年の研修員たちは、地域の人々と調査結果を共有するため、宮島小中学校で発表会を開いた。「島の観光を持続させるためには、若い世代の参加が不可欠」「エコツーリズムをもっと推進すべき」「伝統工芸の体験型プログラムを増やして観光客と職人の交流の場を増やしては」など数々の鋭い指摘に、生徒や保護者も驚きを見せていた。

「研修員からの指摘で気付かされることも多いんです」と浜田さん。「時代の流れに伴い、宮島も『変化』が求められています。私たちも、彼らとともに試行錯誤しています。現在も、自治体、企業、地域のNGOとの連携を強化しながら、新しい観光のカタチを模索しているという。

宮島と途上国。地域の資源を誇りに、より良い観光振興を目指し、それぞれの取り組みは続く。

日本が誇る、一大観光地を訪ねて

6月下旬の蒸し暑い日、広島市内を走る路面電車の終着駅、宮島口からフェリーに乗った。平日でそれほど混んではないが、乗客のほとんどが外国人であることに気付く。目指すは「宮島」。世界的な観光地として有名な場所だ。

フェリーターミナルに降り立ち、外に出ると、人なつこい鹿たちがお出迎え。彼らとともに海沿いを歩いていると、目の前に、かの有名な「厳島神社」が現れた。海中に浮かぶ朱塗りの大鳥居と寝殿造の社の美しさに、思わず言葉が失う。その後には、青々とした弥山原始林が広がっていた。

宮島を訪れる観光客は年間約350万人。1998年に厳島神社が世界遺産に登録されてから、その数は急速に増加したという。日本人にとっては、修学旅行や遠足の定番。家族でも、友達同士でも、あらゆる楽しみ方ができる観光地として幅広い層に人気だ。

そんな島の観光を支えてきたのは、言うまでもなく、宮島に住む地域の人たちだ。島の人口は、わずか1800人。その約7割が、何らかの形で観光産業に携わっている。

「地域の人たちは、自分たちで『神の島』を守っていくという意識が高い。観光客が増えても、『宮島らしさ』を失わずにいられる理由はそこにあります」。そう話すのは、社団法人宮島観光協会の浜田敏博事務局長。20年以

自然や遺産があふれる宮島の魅力に、世界中の観光客が魅了される



宮島小中学校の子どもの前で発表。研修員自身が感じた宮島の魅力や問題点、解決策などを伝えた



*国立公園の管理に参加する地域ボランティア。自然保護の普及啓発を図るため、観光客を対象に環境教育を兼ねたガイドなどを行っている。



山で採取した野生ランが売られるエルバジェの市場。自然保護区での天然資源の採取は法律で規制されているが、すべてを取り締まるのは難しい状況にある

止まらない不法採取

首都パナマ市から車で西に約1時間半。1000メートルを超える山々に囲まれた、緑豊かな盆地の町エルバジェに到着する。人口は4000人ほど。年間を通して20〜30度という快適な気候のため、避暑地や別荘地として人気が高く、国内外から多くの人々が訪れる。

日曜日の朝、町の市場は観光客や売り子でにぎわっていた。毎週末、ここには周辺の山岳地域に住む人々が、観光客を目当てに野菜や果物、工芸品などを売りに来る。ふと目を向けると、色とりどりのランの花が所狭しと並ぶ店がいくつもあった。「山の熱帯雨林から不法採取された野生のランです。絶滅危惧種もこ



国際協力の担い手たち

COSPA (パナマ野生ラン保護活動)

ランを守り山岳住民の生活を支える

世界的にも貴重なパナマの野生ランが、今、生活のために不法採取する人々によって危機に陥っている。COSPAは人々にランの栽培技術を指導するとともに、エコツーリズムを活用しながら、その保護活動に努めている。



絶滅危惧種のエスピリト・サント。COSPAでは、オーナー制度を設けてこの花の保護を呼び掛けている。最近では、パナマの元青年海外協力隊でもあるCOSPAのメンバーが職場で声を掛け、一企業の社会貢献事業として保護に協力するなど、日本でも支援の輪が広がっている



APROVACAのメンバーにランの栽培方法を指導する明智さん

エコツーリズムで知る自然の価値

帰国後、明智さんはAPROVACAの運営を助けるため、日本側の支援組織となるCOSPAを設立。日本からボランティアを派遣し、APROVACAの運営体制を整備したり、保護センターの一部を改修し、栽培中のランを観光客に見てもらえるようにするなど、支援を続けてきた。

そして08年から、COSPAがJICAの草の根技術協力を通じて準備してきたのが、野生ランの保護と山岳住民の生計向上を目的としたエコツーリズム。自然保護区を巡り、多種多様な野生ランを堪能してもらおうという内容だ。住民を雇い、エコツアーガイドとして養成したほか、けもの道同然だった自然保護区の山道を整備し、入山者の監視を行う管理者を配置した。さらに、パンフレットやホームページを作成するなど広報活動にも力を入れた。

発展はまだまだこれからだが、受け入れ体制が整ったことで日本からのスタディーツアーも組まれるようになるなど、今後さらに活



整備された山道を歩くエコツーリズムの参加者



05年、愛知万博で、優れた環境技術を持つ企業やNGOに贈られる「愛・地球賞」を受賞。明智さんも現地のメンバーと喜びを分かち合った

性化が期待できそうだ。保護センターには年間1000人を超える観光客が訪れており、入場料の収入が入るようになり、APROVACAの運営も安定しつつある。そして何よりも、以前はランを採るばかりだった住民の間に、新たな仕事へのやりがいと誇りが芽生えている。

明智さんが初めてエルバジェを訪れてから10年。たくさん日本人ボランティアや現地の人々の助けを得ながら、今年も一度は両国を往復し、活動を続ける。「ランの保護やエコツーリズムを通じて、自分たちの周りにある自然の価値、そして自然の保護が自分たちの生活に有益であるということに、一人でも多く気付いてほしい」。そんな願いとともに、この地が野生ランの楽園に戻る日のことを、今日も夢見ている。

ここに含まれています」。複雑な表情を浮かべながらそう話すのは、COSPA (パナマ野生ラン保護活動)の明智洗一郎さん。「ランを市場で売って1日に得る収入は、一家の主が別荘番や草刈をして手にする日当の約5倍。貧しい山岳住民にとって、野生ランは生活の糧を得るための簡単な方法なんです」。

国土が熱帯雨林に覆われ、豊かな生態系に恵まれるパナマ。特にランは、このエルバジェと周辺の山々を中心に多くの種類が生育し、その数はパナマ固有種も含め1500以上に上る。だが今、この世界でも例を見ない花の園では、開発によって熱帯雨林の伐採が進んでいるのに加え、長年の山岳住民による採取が原因で、野生ランの個体数が急速に減り続けている。「以前は至る所で見られた花が、最近は市場で見掛けるだけになった」といった観光客や町の人々の声が最近も多く聞かれる。

「花を育て、植生地に戻すだけでは不十分。野生ランに代わる別の生計手段を見つける必要がある、そう考えたんです」



APROVACAが運営に当たっている保護センターの入り口。訪れる観光客も徐々に増えている

特別レポート

文=三田村 麻季子 (JICA広報室)
写真=久野 真一 (JICA広報室)



はだしで暮らす 途上国の子どもたちへ

世界には、貧しさ故に靴が買えず、はだしでの生活を余儀なくされている子どもたちがたくさんいる。そうしているうちに足からばい菌が入り、破傷風などの感染症にかかってしまうことも少なくない。

日本国内でサイズが合わなくなった運動靴を集めて、途上国の子どもたちに贈る「スマイル アフリカ プロジェクト」。シドニーオリンピック・女子マラソン金メダリストの高橋尚子さんの呼び掛けにより始まったこのプロジェクトは、子どもたちが安全に元氣いっばい走り回れるよう、夢を与えるだけでなく、足から感染する病氣から命を守ることも目指している。

5月23日、このプロジェクトの一大イベントとして、ケニアの首都ナイロビで第2回ソトコトサファリマラソンが開かれた。

ソトコトサファリマラソンは、ケニア国内で環境保全の必要性を訴えることを目的に毎年5月に開催。今回の大会では、昨年引き続きQちゃんがフロントランナーを務めたほか、ロードライバーの篠塚建次郎さんがソーラーカーで先導した。マラソンの先導車にソーラーカーが使用されたのは、アフリカ大陸初の試み。太陽光パネルが張られた車体の周りにはたくさんの人々が集まり、排気ガスゼロの環境

ナクル湖国立公園を訪れた子どもたちと、元気に駆け出すQちゃん。ケニアは世界有数のマラソン大国。ここから未来のランナーが生まれるかもしれない

Qちゃんがケニアへ ～平和と自然環境保全のために一緒に走ろう～

ケニアの子どもたちに運動靴を寄贈する「スマイル アフリカ プロジェクト」。このプロジェクトの旗振り役となっている、Qちゃんこと高橋尚子さんは、今年5月、日本の人々の思いが詰まった運動靴を届けるため、再びケニアの地を踏んだ。

に優しい車に関心を寄せていた。マラソンには、JICAケニア事務所の職員や現地スタッフのほか、青年海外協力隊員らもエントリー。参加者は約2600人にも及び、大盛況だった。また、当日は敷地内にJICAブースが設営され、隊員によるあん摩マッサージのデモンストレーション、生計向上のため地方の女性と製作した民芸品などの販売も行われ、参加者の注目を集めていた。

美しい湖と フラミンゴを守るため

Qちゃん率いる「スマイル アフリカ プロジェクト」による子どもたちへの靴の寄贈は、ケニアで活動中の青年海外協力隊などを通じて行われている。今回の訪問中、Qちゃんは隊員と一緒に地元の小中学校を訪れ、子どもたちに直接、運動靴を手渡した。「日本で靴を寄贈してくれた子どもたちの温かい思いを届けることができました。この靴を履いて、ケニアの子どもたちにも、自分の夢を追いかけてほしいです」。

さらに、プロジェクトに協力している隊員の一人、ケニア野生生物公社(KWS) ナクル湖国立公園で活動している高橋美穂さん(環境教育)を訪ね、フラミンゴの一大生息地として知られ、ラムサール条約※にも指定されているナクル湖と湖に流入するマカリア川を視察した。



ソトコト サファリマラソンで、参加者に励ましのエールを贈りながら走るQちゃん。「マラソンを通じて、ケニアと日本人学校の子どもたちの間にも小さな国際交流が生まれています」

地域で最も海拔が低く、かつ閉鎖湖で水が流れ出る川が通っていないナクル湖には、地域の生活排水や廃棄物が流れ込んでくる。さらに、近年の気候変動の影響により水量の減少も激しく、水位低下のため、そこに生息するフラミンゴが近隣諸国の湖に移動してしまうなど、地域が直面する自然環境問題は深刻だ。

ピンク色のフラミンゴが連なる「美しい湖」の風景と、ビンヤベットポトル、靴などが河川から流入し、汚染の脅威にさらされる湖の実情を目の当たりにして、ショックを隠しきれない様子だったQちゃん。

「どこを見てもごみが散らばっていて、そのすぐそばには、フラミンゴが集まっている。本当に悲しいことです。10年後、美しいナクル湖の姿は残っているのでしょうか」

こうした状況を改善すべく、高橋隊員が所属するKWSの教育センターでは、「クリーンアップキャンペーン」と



足元を見ると、ほとんどがボロボロのサンダル。中にははだしの子もいる。ガラスの破片が落ちていたことも多く、生傷が絶えない



キベラスラム内の小学校で、日本から持ってきた運動靴を手渡すQちゃん。まだ十分きれいな日本の靴に、子どもたちも興奮気味



湖周辺のごみ拾いをしていると、すぐに両手がペットボトルや紙くずでいっぱい。「大自然に恵まれているにもかかわらず、環境保全の重要性を理解している人がまだまだ少ないんです」と高橋隊員(左)



ナクル湖に浮かぶフラミンゴの群れを眺めるQちゃん。この美しい鳥たちのすみかが、自然環境汚染により奪われつつある

称して、月1回、地域の子どもたちとともに、国立公園内のごみ拾いを行っている。「国立公園を訪れる子どもたちに、自然環境を守る大切さを伝えたいんです」(高橋隊員)。

しかし高橋隊員は、活動の中で感じる難しさをこう打ち明ける。

「子どもたちにどんなに自然環境の大切さを訴えても、家に帰れば親が平気でごみを捨てています。そのような状況で、きちんと理解してもらうことはとても難しい。まずは『ごみを街や川に捨てない』という基本的なことから教えて、少しずつ意識の変化を促さなければならぬのです」

高橋隊員の活動も、Qちゃんの「スマイル アフリカ プロジェクト」もまだ始まったばかり。ケニアの豊かな自然環境を守るため、そして子どもたちが笑顔を届けるため、二人はこれからも走り続けていく。



アジア子ども基金
(ACF JAPAN)

ネパールの村に バイオガスと乳牛を

首都カトマンズ北部にあるヌアコット郡カカニ地区。今ここで、貧困家庭を救うためのマイクロクレジット事業が進められている。NGOアジア子ども基金(ACF JAPAN)が支援する、乳牛やバイオガス装置を普及するための取り組みだ。

マイクロクレジット事業を 真の貧困対策に

2007年、ヌアコット郡カカニ地区で暮らす友人宅を訪れたアジア子ども基金(ACF JAPAN)代表の鈴木まさこさんは、ある意外な発見をした。

「そのお宅ではガスで調理していたんです。驚きました。カカニ地区は電気もなく、薪で煮炊きするのが普通だと思っていましたから。なぜ、みんなは使わないの?と聞いてみたんです」

鈴木さんが発見したガスは、牛糞や人糞をタンク内で発酵させメタンガスを発生させる「バイオガス装置」によるものだった。ガスは炊事や暖房に使える。

しかし、友人の答えは「高価すぎて、みんなが設置するのは難しい」だった。カカニ地区には、現金収入がほとんどない貧困家庭が多い。バイオガス装置の敷設がネパール政府に推奨されているとはい

バイオガスと乳牛が もたらす恩恵は大きい

開始に先立って、ACF JAPANは、現地NGO、ACF NEPALを設立、融資の対象となる組合の選定などを任せている。信頼できる農村組合を選ぶには、現地の人の目が一番だからだ。また、ACF NEPALのスタッフは、実際に組合員宅を訪れ、バイオガス装置の設置や乳牛の飼育が可能かどうか確認する。また、乳牛の選定は組合に一任されるが、買い付けにはスタッフが同行。融資を確実に貧困層に届け、効果を上げるための工夫だ。

この事業では、組合へは無担保・利息3%で融資され、組合から組合員へは利息6%で貸し付けられる。今回JICA基金を活用し、バイオガス装置8基と乳牛8頭分の資金が4つの組合に融資さ



バイオガス装置の設置方法について説明を受ける夫婦(左)。地中に岩盤がないこと、南向きであることなど、場所の選定に当たってスタッフ(中央)は何度も足を運ぶ



(上)購入した乳牛をトラックから降ろし、農家に運ぶACF NEPALのスタッフ。言うことを聞かず、暴れ出すこともある乳牛の扱いは慣れた人でないと難しい
(下)バイオガス装置の設置にはトイレが必要。それにより、人々の衛生状態も改善しつつある

バイオガス装置を設置した家庭。トイレからこの装置に流された糞を水と混ぜてガスを発生させる

れ、最貧農家や障害者家庭、寡婦家庭を優先して選ばれた貸付対象の組合員は約300家族のうち16家族に上った。しかも、牛小屋の無償提供や返済期間の延長といった特典付きだ。

こうした取り組みは、さまざまなところで効果を上げている。「薪を取りに行く回数が減って、その分、イチゴの収穫量が増えた」と語るのは、バイオガス装置を設置したビルマヤさん。バイオガスを利用することで、これまで使っていた薪を用いるかまどは不要となる。薪集めの重労働からも解放され、これまでに以上に農作業に時間が割けるといふわけだ。樹木の伐採もなくなるので、山野の荒廃も止められる。

また、バイオガス装置の設置には屋内トイレの併設が必要。もともとカカニ地区の78%の家庭にトイレがなかったが、設置すれば、安全な飲料水の確保や下痢の軽減、感染症の防止にもつながる。さらに、ガスを分離した後に残る液体が良質の液体肥料になり、有機農業に取り組みムスダムさんは積極的にこの液肥を利用している。

「ミルクを販売して、息子を高校へやるのができた」と喜ぶのは乳牛を購入したチルママさん。1頭分の糞で5人家族の1日の炊事が賄えるほどのエネルギーを提供してくれる乳牛は、現金収入を得る。即戦力ともなっている。

しかし課題もある。「バイオガスは現金収入につながる」「乳牛は世話が大変すぎる。肉として売ってしまいたい」という声も聞かれる。かつて、ネパールでの孤児院建設に失敗した経験を持つ鈴木さんは、現地の人々とのコミュニケーションを何よりも心がけている。こうした地域の人からの声は、今後の事業をより良いものとするための貴重な指針だ。

「何をしてほしいのか、こちらは何ができるのか、とことん話し合いながら、現地の人と私たちが補い合って活動していくことが何よりも大切です」

孤児たちの寂しく悲しそうな目が今も忘れられない鈴木さん。孤児を生む背景となつている貧困の削減は、未来の孤児たちを救うことでもある。マイクロクレジット事業を進めながら、鈴木さんは今、カカニ地区の人々に思いを寄せ、その声に静かに耳を傾けている。

え、ここでは高嶺の花。一般家庭に普及させるのは難しい状況だった。

そこでACF JAPANは、貧困家庭にお金を低利で貸し付けるマイクロクレジット事業を通じて、バイオガス装置の普及を支援することに。住民の相互扶助組織である農村組合に融資し、その資金を組合員である住民が装置の購入に充てるのだ。

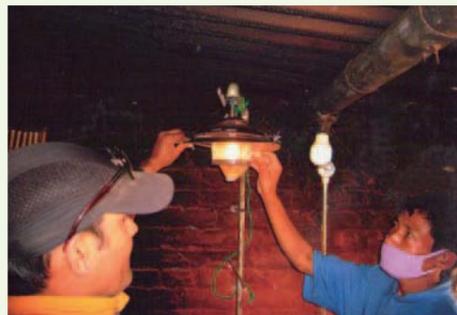
しかし、その試みは「まだまだ甘かった」と鈴木さんは語る。バイオガスの原料となる糞を提供してくれるのは、乳牛や水牛だ。だが、乳牛や水牛を所有できるのは、比較的富裕な家庭。バイオガス装置だけを対象にしているのは決して貧困家庭の救済にはならない。

現地の人々にそう指摘された鈴木さんたちは、バイオガス装置に加え、乳牛の購入も融資の対象にした。そして、この原資の一部にJICA基金を活用し、09年、ようやく本場の貧困対策がスタートした。



「アジア子ども基金」へのお問い合わせはこちら
〒507-0063岐阜県多治見市松坂町4-8-82
TEL : 0574-64-2214
Email : mumin1108@sf.commufa.jp
URL : http://acfjapan.greater.jp/

女性や子どもの仕事だった薪拾い。バイオガス装置の設置で、彼女たちはこの重労働から解放された



夜間、部屋に明かりをともせるようになった

あなたの小さな一歩から始まる国際協力 世界の人びとのためのJICA基金

JICAでは、国際協力に関心のある日本の皆さまからの寄付を、開発途上国の貧困削減や環境保全への取り組みに活用する「世界の人びとのためのJICA基金」で受け付けています。皆さまのご支援をお待ちしております。

寄付金の使われ方

お寄せいただいた寄付金は、途上国の貧困削減、医療や教育の提供、環境問題の解決などに取り組むNGOの活動に充てられます。各支援活動や寄付金事業収支についてのご報告は、「JICA寄付サイト」で公表します。

寄付の方法

「JICA寄付サイト」からお申し込み下さい。クレジットカードによる決済や、銀行・郵便振込みなどがお使いいただけます。
JICA寄付サイトURL : <http://www.kifu.jica.go.jp/>



(上)9月に終了するグアテマラのプロジェクト評価の一環として、市の観光自治委員会(CAT)のメンバーに活動の成果やその後の方針などをインタビューする石田さん(左)
(下)観光スポットの一つ、ナフトウニッチ洞窟につながる遊歩道には案内板を設置。散策に訪れた人が楽しめるよう、現在地やその場所にまつわる話を紹介



支援は「相手の立場に立つ」 ことから始まる

JICA産業開発部で、観光開発分野の支援を担当する石田美帆さん。地域住民に利益をもたらす観光開発を実現させるため、縁の下の力持ちとしてプロジェクトを推進している。

大

学時代に東南アジアなどの開発途上国を訪れてから、ODA(政府開発援助)、中でも途上国に低利で融資した開発資金の返済を求め、自助努力を促す円借款への関心が高まりました。そして国際協力銀行(JBIC、当時)

に就職し、最初に配属されたのが企業金融部。海外に進出する日系企業への融資が主な業務で、直接ODAの仕事ではありませんでしたが、日本のものづくりを支える製造業の方々と接するうち、徐々にこの分野の面白さにのめり込んでいきました。しかし同時に、いずれはODAにも携わりたいという思いがあり、新JICA設立1年前の2007年に、希望して中央アジア地域への円借款を担当する部署に異動しました。

そして現在は、観光分野の技術協力を担当しています。これまで「観光」は、多くの側面だったので、開発については多くの素人。最初は、目の前の仕事をこなすので精いっぱいでした。しかし今は、より現地のニーズに合った観光開発に向けて、いかに先を見越しながらプロジェクトを進めるべきか、日ごろから考えています。

例えばグアテマラでは、自然、遺跡、先住民文化など観光資源が豊富にもかかわらず、それらが十分に活用されてい

ません。外から来る観光客にとっては魅力的な観光資源でも、地元の人には当たり前すぎて、その価値や魅力に気付いていないことが多いからです。まずは自分たちの周りにどんな観光資源があるかを発見してもらおう。次は、それをどう売り込めばよいかを考えてもらう。考えて、やってみて、また考えて……。そんなふう

に、地域の人々が自ら考え、行動することができるよう、広い視野で彼らを導いていくことが、JICAの役割だと思えます。「観光開発」と聞くと、リゾート開発やテーマパークの建設などを想像しますが、JICAが重視するのは、貧困削減につながる観光開発。大規模な投資をした企業だけでなく、貧困層も含めた地元の人々が一丸となり、地域の観光ポテンシャルに基づいた最良の観光開発を進め、地域全体が潤うことが大切だと考えています。(8ページに関連記事)。

また観光開発には、政府機関、ホテルやレストランなどの経営者、土産を売る地域住民など、あらゆる組織や人々が関わっています。それぞれの意見をくみ上げ、皆が納得できるような活動をまとめ上げるには、柔軟で臨機応変な対応が求められます。それが、この分野の支援の難しさであり、また面白さでもあります。中でも重要なのが、「人を集める」という



JICA産業開発部
産業・貿易課

石田 美帆
ISHIDA Miho

大学卒業後、2003年国際協力銀行(JBIC)に就職。企業金融部(当時)、08年10月の新JICA設立後、東・中央アジア部を経て、09年5月より現職。

基本的なこと。「観光促進のための研修を行います」と住民を誘っても、それが自分自身にどう役立つのかを理解してもらえない限り、集まってはくれません。また、彼らには彼らの人間関係があり、それが活動を妨げることもあります。例えば、足場の悪い遊歩道に手すりをつくらせようと思っても、住民グループ同士がちょっとした諍いや対立が原因で、意見がまとまらないこともよくあります。

そこで、私が日々心掛けてるのが、「相手の立場に立つて物事を考える」ということ。意見が合わず、無理難題を一方的に要求されると頭にくることもありますが(笑)。でも、そんな時でもお互いにとって良い方法があるはず。相手には相手なりの言い分やそう主張する理由があるのですから、まずはコミュニケーションをしっかりと取り、信頼関係を築くことが、最初の一步。それが目標を達成するための近道だと信じています。



外資系ホテルや特定の観光スポットに観光客が集中していたパレスチナのジェリコ市では、刺しゅう細工(写真)など魅力ある土産物を開発中。町のパズールなどにも立ち寄ってもらい地域全体が潤うよう、努めている

01

青年海外協力隊が菅首相に帰国報告

6月14日、「内閣総理大臣主催青年海外協力隊帰国隊員報告会」が総理官邸で開催されました。当日は、全国から帰国隊員約150人が招かれ、菅直人首相、仙谷由人官房長官、岡田克也外務大臣をはじめ、「日本の国際協力」特に青年海外協力隊の活動を支援する国会議員の会」のメンバーである議員約30人から激励を受けました。

菅首相は冒頭のあいさつで、「協力隊のような若者による活動は、日本の国際協力の強み。帰国後も、その経験を存分に発揮できるような場をつくってほしい」と述べました。さらに仙谷官房長官も、「途上国で感じたことを、日本でも伝えてほしい」とエールを贈りました。

未希子さん(2007～09年・ポリビア/村落開発普及員)、窪田保さん(04～06年・モザンビーク/理数科教師)が、それぞれの活動について報告。「外国人だからできることも必ずある」、「小さな失敗の積み重ねは貴重な財産」などと話し、今後も日本で国際協力を続けていく決意を示しました。その後、帰国隊員との懇談の時間も設けられ、参加者は途上国での協力隊員の活動に興味深く耳を傾けていました。

最後に、緒方貞子JICA理事長が「これだけの方々に、協力隊事業を評価していただけるのはありがたい。これからも、『世界も日本も元気にするボランティア』をスローガンに、より効果的な事業を展開していきたい」と締めくくりました。



(上)出席者に激励のメッセージを贈る菅首相
(下)岡田外務大臣と和やかに懇談する帰国隊員

02

エジプト文化財「保存修復センター」が完成

年間約1000万人の観光客が訪れるエジプト。その観光の要にもなっている「エジプト考古学博物館」の老朽化に伴い、新たに「大エジプト博物館」を建設する事業が進められていますが、このたび、その一環で整備されていた「保存修復センター」が完成しました。6月14日の開所式では、12のラボ(研究室)と8つの収蔵庫などが公開されました。

開館から100年以上が経過し、施設の老朽化だけでなく、スペースが不足し、収蔵品の保存・修復・研究体制が整っていなかった考古学博物館。これを受けてJICAは、円借款による博物館の新設と、技術協力プロジェクトによる収蔵文化財のデータベース構築、保存修復技師の育成を支援しています。完成したセンターでは現在、JICA専門家の指導のもと、約120人の技師により、彩色木棺、動物のミイラ、石碑の保存修復処置や素材の解明などが進められています。大エジプト博物館の開館時に約5万点、最終的には10万点の文化財の展示を目指しています。

03

日メコン古都シンポジウム「未来へつなごうーいにしえのきずな」開催

平城遷都1300年、ハノイ遷都100年、ビエンチャン遷都450年に当たる今年の6月22日、奈良市で日メコン古都シンポジウム「未来へつなごうーいにしえのきずな」(主催・外務省)が開催されました。当日は、メコン地域5カ国(カンボジア、タイ、ベトナム、ミャンマー、ラオス)から古都・文化遺産保護に携わる関係者が来日し、文化遺産の価値を伝える教育、住民参加型の遺産保護や観光振興、それに対する日メコン地域間のネットワークづくりなどについて、日本人専門家らと意見を交わしました。

メイン会場の外では、外務省や奈良県、JICAなどがブースを出展。JICAは、タイ、カンボジア、ベトナムで行った世界遺産の保護活動や、各国での観光分野への協力についてアピールしました。



会場には地方自治体、文化遺産保護、観光分野の関係者など約100人が来場

イチャオシ!

M OVIE

『中国2010年上海万博博覧会開催記念 中国映画の全貌2010』

近年、急成長を続ける一方、その陰で貧富の差の拡大や少数民族の問題などが生じている中国。経済成長、戦争、少数民族、文学などさまざまなテーマから、その中国の「今」と「昔」を映し出した作品が上映される。注目作品は、2001年ベルリン国際映画祭で銀熊賞(審査員グランプリ)を受賞した『北京の自転車』。農村から出稼ぎで北京にやって来たガイと、都会育ちのジェン。経済発展による都会と農村の格差の拡大を背景に、2人の少年の交流と青春を通して、近代の中国社会のゆがみを描いている。



『北京の自転車』(2000年)より

会期：8月27日(金)まで
上映作品：中国・香港映画 全60作品
会場：新宿K's Cinema(東京都新宿区)
問：グアバ・グアボ
TEL：03-6427-4796
URL：www.ks-cinema.com/movie/china_2010.html

E VENT

『JATA世界旅行博2010』開催!

毎年100を超える国・地域から大使館、航空会社、ホテル、旅行会社などが集結するアジア最大の旅行イベント「旅行博」。今年は「世界を活かす旅の力一踏み出そう 明日を拓こう」をテーマに、文化、交流、経済、健康、教育などの分野から“旅の魅力”を紹介する。各ブースでは、各国・地域のスタッフから、現地の詳しい情報を直接聞くことができるほか、ダンスや音楽などのパフォーマンス、料理、クイズラリーなど、思わず旅に出たくなる楽しい企画が盛りだくさん。

日時：9月25日(土) 10時~18時、26日(日) 10時~17時
会場：東京ビッグサイト(東京都江東区)
入場料：大人1,200円 学生600円(前売りあり)
主催：JATA(社団法人日本旅行業協会)国際観光会議・世界旅行博実行委員会
問：03-5891-1150
URL：http://ryokohaku.com/

ペア入場券を
10人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

B OOK

『ぼくは8歳、エイズで死んでいくぼくの話を書いて。 ~南アフリカの570万人のHIV感染者と140万人のエイズ 孤児たち~』

サッカーワールドカップ開催で盛り上がりを見せた南アフリカ共和国。一方で、全世界のHIV感染者の6人に1人がこの国にいてご存じだろうか。年間35万人の死者を出し、140万人ものエイズ孤児は今も増え続けている。そして、感染者に対する偏見と差別が激しく、家族からも拒否される人、職を失う人、感染したと知りながらも内緒にする人など、エイズ患者と一緒に暮らせることのできないゆがんだ社会のしくみが、新たな感染者を生み出す悪循環が起きている。本書は、現地で約2年間エイズ患者と接してきた著者が、HIV/エイズの知識や取り巻く社会問題、国内外のエイズ撲滅への取り組みを、実例を多用しながら分かりやすく紹介。元サッカー日本代表選手の北澤豪さんもおススメの一冊。



青木美由紀 著
合同出版
1,365円(税込)

この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

B OOK

『BOPビジネスのフロンティア —途上国市場の潜在的可能性と官民連携—』

新興国が台頭し、先進国経済が停滞する中、一人当たり年間所得が3,000ドル以下の低所得階層「BOP層(Base of the Pyramid)」40億人をターゲットにした「BOPビジネス」が注目されている。これは、貧困や劣悪な衛生環境などBOP層が抱える問題の解決のために、企業が利益を追求しながら、政府、国際機関、援助機関、NGOといったさまざまなアクターと連携して活動する新しい形のビジネス。市場規模は日本のGDP(国内総生産)に匹敵する5兆ドルとされる。本書では、経済産業省の調査結果をもとに、BOPビジネスの可能性、重点分野や地域、課題などに加え、欧米や日本企業の事例、途上国側のニーズといった実践的な内容を幅広く学べる。



経済産業省貿易経済協力局通商金融・経済協力課 編
財団法人 経済産業調査会
2,310円(税込)

この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ



地球ギャラリー vol.23

Philippines

【フィリピン】

文・写真=木下 健 (写真家)

娘のために、
文字を覚えたい

補習教室で文字を学ぶエレノア。絵本を読んでもらえるのを娘ジャーネルも楽しみに待っている



D



F



A

A.「小さな学校」で学ぶ就学前の子どもたち
 B.「小さな学校」では、子どもたちに給食も出している
 C.みずみずしくて甘いフルーツ、カシュイが大好きな子どもたち。固い実のカシューナッツは市場でも高く売れる



B



C

D.炭焼きをするロウエナの家族。これも生計を立てるための大切な仕事だ
 E.おコメに交ざったゴミを取るロウエナ。ただいま食事の準備中
 F.ジャックフルーツは野菜として夕食に

フィリピンの首都マニラの北の外れにあるカラオカンの長距離バス発着所から、北西に向かうバスに乗る。行く先は、マニラより約150キロ、南シナ海に面した小さな町ポトラン。ここには、かつての山岳民族の定住地がある。1970年代、木の伐採を理由に、山で生活していた彼らを平地に移住させたマルコス政権。その一つ、約400人の山岳民族が住む集落がマシカップだ。

初めてマシカップを訪れたのは1984年4月のこと。以来私は、フィリピンでは「アエタ」と少し差別的に呼ばれる山岳の民ネグリのトの子どもたちを支援する「ひとりだけのNGO」として、就学前の子どもたちの識字教育「小さな学校」を開いている。

長年この地に通ううち、ある家族との交流が生まれ、中でも三女のロウエナと親しくなった。貧

しい上に病気がちで留年を繰り返していたが、「ひとりだけのNGO」の精神里親の学費支援を受け、17歳でようやく小学校を卒業した彼女。その後は、「小さな学校」のアシスタントを務めるまでに成長した。

フィリピンの教育制度は6歳から6年間で小学校。日本と同じだが、入学前には簡単な試験があり、さらに進級試験もある。しかし、貧しい山岳民族の人々は親でも教育を受けていない場合が多くわが子に教えられないため、就学前の子どもたちの識字教育は欠かせない。実際、マシカップでも毎年約10人の就学前児童は、学力が足りなかったり、お金がなかったりして、入学できないことがほとんどだ。さらに、入学しても進級できず、同じ学年を繰り返す子どもも少なくない。



J.2007年、長女ジャネルが誕生。子を取り上げたのは、祖父サントス
 K.1歳。歩き始めたジャネル。サントスも嬉しそう
 L.3歳になったジャネルは、誕生日プレゼントにもらったクマのぬいぐるみを大切にしている
 M.山で切った竹を売りに出すラウロ。1本6ペソ(12円)。この日は、50本で300ペソを手に入れた



N.エレノアの読み聞かせを手助けするロウェナ(右)。後ろからのぞき込むロウェナの長女マイカは14歳で4年生に復帰した



M



I



H

H.いつでも字が書けるように、と鉛筆を髪に差すエレノア
 I.『仲良しのレオンとダガ(ライオンとネズミ)』のお話が大好きなジャネルのために早く字を覚えたいエレノア

こうした状況を受け、2009年からは地元
 のNGOによる新たな補習プログラムが始まった。
 そのかいあつてか、小学校に入学できる子どもが
 増え、さらには進級をあきらめて学校を休んで
 いた児童が復学するようになった。
 この補習プログラムには、子どもに交ざって大
 人もいた。ロウェナの弟ラウロの妻エレノア(25)
 だ。貧しいビサヤ諸島出身のエレノアは、子ども
 ころに十分な教育を受けることができず、元アメ
 リカ海軍基地の町スービックで家政婦として働い
 ているときにラウロと出会い結婚、マシカップにや
 つて来た。そして3年前、長女のジャネルを出産。
 現在3歳になった娘に「絵本を読んで」とせがま
 れるようになったものの、文字が読めない。どう
 しても字を覚えたくて補習プログラムに参加し
 たのだ。まだ勉強を始めて間もないエレノア。た
 どたどしい発音だが、母に絵本を読んでもらっ
 ているときのジャネルの瞳は輝いている。

G.補習プログラムで子どもに交ざって勉強するエレノア。補習教室の先生はロウェナの叔母



農業支援では、ミンダナオ島の160のモデル圃場で稲作や野菜栽培を指導。「土壌づくりやこまめな手入れで、収穫量がこんなに増えるなんて」と話す農民

台風に見舞われやすいフィリピン。昨秋、連続上陸した台風の被災地マニラ首都圏



インフラ支援では、中部ルソン地域内の物流を活性化させる約90キロの高速道路を整備

JICAの活動 in フィリピン

経済成長を促進し、貧困層の自立と平和を

経済成長を続けながらも、地域格差や紛争などさまざまな課題を抱えるフィリピン。JICAは、持続的な成長、格差の是正、平和と安定に向けた支援に取り組んでいる。

近年の経済成長は約5%と比較的安定しているものの、都市部に経済活動が集中し、都市と地方との格差が拡大するフィリピン。また、40年以上紛争が続く南部の最貧困地域ミンダナオ島では、和平と復興への支援が急がれている。この6月にはアキノ新大統領が就任し、公正な統治と貧困撲滅を最大の職務と宣言した。

こうした背景の下JICAは、「雇用機会の創出に向けた持続的経済成長」、「貧困層の自立支援と生活環境の改善」、「ミンダナオの平和と安定」を重点課題に、投資促進、インフラ、農業、平和構築などさまざまな分野で支援を行っている。

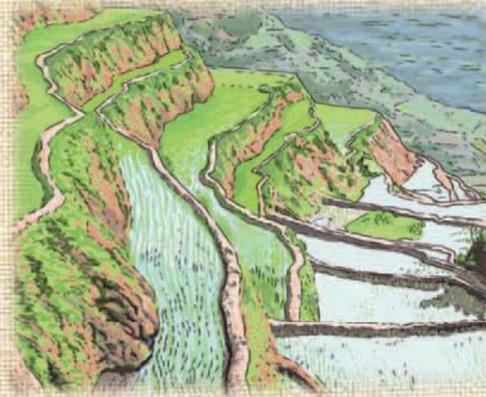
投資促進の分野では、「フィリピン投資促進戦略」の策定を支援。日本からの投資を5年間で1.5倍に伸ばす計画も盛り込んだ。

さらにインフラ支援では、中部ルソン地域に高速道路を建設。同地域は、農作物の生産地や集散地、中核的な工業地帯として重要な拠点であり、物流のハブ機能が期待されているものの、周辺の道路の整備が行き届いておらず、十分に役割を果たしていなかった。しかし、高速道路が開通したことで、通行時間が約3分の1に短縮され、物流が円滑になった。また、気候変動の影響を最も受けやすいといわれている同国。昨秋、連続上陸した台風により、甚大な被害が発生したため、現在、インフラの復旧支援を実施中だ。

農業分野では、紛争の長期化により貧困率が高いミンダナオ島で、農家を対象に、稲作や野菜栽培の技術を指導。その結果、5年間で農家4,000戸の農業収入が倍増し、地域全体の生活水準

が向上、住民は自立への第一歩を踏み出している。この成果のカギとなったのはフィリピン稲研究所との連携だ。紛争により現地入りできない日本人専門家に代わって、同研究所が関係機関との調整や農業普及員のサポートを行ったことで、活動を円滑に進めることが可能となった。

さらにミンダナオ島では平和構築支援も実施。フィリピン政府と反政府組織との和平合意に開発を通じて貢献すべく、復興開発支援事業を行うとともに、2009年の停戦合意を受け、現地で停戦監視活動を行う「国際監視団」に対し、復興開発アドバイザーとして2人のJICA職員を派遣中。インフラ、教育、医療分野の支援ニーズに基づき開発計画を策定するなど、開発援助の視点から和平促進に努めている。



北部ルソン島にある棚田群は、山岳民族が2000年にわたり築き上げたともいわれる。世界遺産に指定。



地球ギャラリー Vol.23 Philippines フィリピン

Illustration / Hori Takao

アジアでは数少ないキリスト教国家。人口の9割以上がキリスト教徒。各地に点在するバロック様式の教会群は世界遺産でもある。



首都：マニラ首都圏
面積：299,404km²(日本の約8割)
人口：9,035万人(2008年)
公用語：フィリピン語と英語(そのほか約80言語)
宗教：カトリック83%、その他のキリスト教10%、イスラム教5%
1人当たり国民総所得(GNI)：1,866ドル(2008年)
経路：日本から直行便で約4~5時間。
通貨：フィリピンペソ(PHP) 1PHP=約1.9円(2010年7月現在)
気候：熱帯気候。雨期(6~11月)と乾期(12~5月)に分かれているが、地域により差がある。気温は一年を通して暖かい。



「ジューニー」と呼ばれる乗り合いバスは、人々の主要な交通手段。派手な装飾が特徴的。



人口の4割近くが農業に従事。国内消費用のコメやトウモロコシのほか、輸出向けのココナツやバナナなどの生産が盛ん。



ATE(アテ)
〒167-0053 東京都杉並区西荻南3丁目15-9
GSハイムB1F
TEL: 03-6765-2665
17時~24時
定休日: 月曜・祝日

☆具を肉類にする時は、野菜と一緒にニンニクをいためて入れる。
☆塩の代わりにナンプレーを使用してもOK。

1. エビの背ワタとひげをとり、背中に切り込みを入れる。
2. ナス、インゲン、タマネギ、トマト、オクラを食べやすい大きさに切り、シユウガをスライスする。サトイモはふかしておく。
3. 土鍋に水を入れ、沸騰させたら2とエビ、粉タマリンド、青トウガラシを加え、強火で5分ほど煮る。
4. 塩、コショウで味を整え、クウシンサイを入れる。

〔作り方〕

1. エビの背ワタとひげをとり、背中に切り込みを入れる。

2. ナス、インゲン、タマネギ、トマト、オクラを食べやすい大きさに切り、シユウガをスライスする。サトイモはふかしておく。

3. 土鍋に水を入れ、沸騰させたら2とエビ、粉タマリンド、青トウガラシを加え、強火で5分ほど煮る。

4. 塩、コショウで味を整え、クウシンサイを入れる。

この店のイチオシメニューの一つが、具だくさんの酸味スープ「シニガン」。タマリンド(豆の一種)で味付けされたスープの酸っぱさが、さっぱりと口の中に広がり、暑い夏でも食欲をそそる。具は魚介類や豚肉、鳥肉などお好みで。ごはんの上にかけて、ナンプレーやトウガラシをまぶして食べるのが地元流だ。「家庭によって味付けはいろいろ。タマリンドの代わりにグリーンマンゴーを使って酸味を出すことも」。酸味の中に具のうまみがぎゅっと詰まった栄養満点の一品。

フィリピン料理 夏バテに効く! 酸味スープ「シニガン」



東南アジア料理といえば、辛いと思われがちだが、フィリピンでは甘味や酸味のある料理が定番。また、スペインや中国の食文化の影響も受け、中華風や西洋風の品々も見られる。

東京・西荻窪駅すぐのフィリピン家庭料理店「ATE(アテ)」は、竹内さん夫婦が営むアットホームなお店。ルソン島出身の奥さんによる、本場仕込みのおふくろの味が堪能できる。

「なんとかしなきや！」で、未来を耕せ！

「これはとてもいいプロジェクトだと思う。ぜひ参加したい」。何気ないそんなコメントが、心に染みてくるとききた。100人近くの方が集まった「なんとかしなきや！プロジェクト」の説明会の質疑応答の中で、とあるNGOの方からいただいた言葉である。

このプロジェクトは国際協力に携わる方々とともに立ち上げる市民参加型の事業。多くの著名人の方々にご賛同いただき、ウェブを中心に展開する。準備期間中、ユーザーとなるNGOのみならず意見を求め、全国を歩いた。時には厳しい意見を浴び、非難されることもあったが、同時に大きな期待も感じる日々が続く。そんな中、国際協力NGOセンター（JANIC）さん、国連開発計画（UNDP）さんよりご賛同をいただき、実行委員会が結成され、プロジェクトは実現に向けて大きく前進した。

なぜ、いま、「なんとかしなきや！」なのか。これまで国際協力に携わる方々が、開発途上国の実情を伝え、国際協力の必要性と参画を訴えてきた。しかし、長引く経済・財政危機やグローバル化の進行、さらには少子高齢化に伴う日本の社会の急激な変容が、将来への不安となつて、この国に住む人々の目を内向きにさせてしまっているように思える。途上国は海の向こうの関係ない世界にしか見られない。

しかし、途上国の「なんとかしなきや！」は、実は日本の「なんとかしなきや！」。途上国が直面する厳しい現実を地球市民的視点で解決すべき。同時に、相互依存の世界では、途上国の安定と発展なくして、日本の未来はない。

このプロジェクトは、そうした幅広い視点でさまざまな国際協力に関係するみなさんの声をひとつにして発信し、よりよい未来を耕す活動である。世界の、そして日本の「なんとかしなきや！」を市民のみならずの理解と行動で解決の道につなげていく。そのためにひとりでも多くの方の参加をお願いしたい。詳細は、「なんとかしなきや！」へ。

広報室広報課長 友成晋也

本誌へのご意見・ご感想や
JICAへのご質問を
お寄せください。

プレゼント
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見や感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

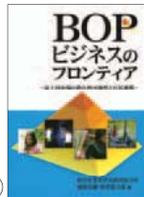
◎応募締切：2010年9月15日

Email: jica@idj.co.jp
FAX: 03-3582-5745 (『JICA's World』編集部宛)

- ① JICAの支援で開発されたMONO (p16参照)
※ご希望の製品名をお書きください。
- ② 『JATA世界旅行博2010』ペア入場券 (p30参照)
- ③ 書籍『ぼくは8歳、エイズで死んでいくぼくの話』(p30参照)
- ④ 書籍『BOPビジネスのフロンティア』(p30参照)



③



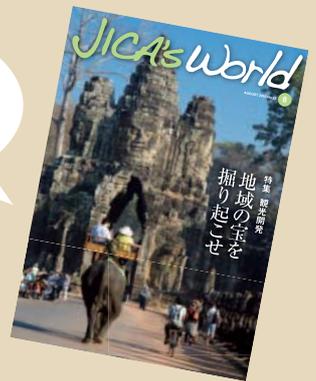
④

本誌をご希望の場合は
下記方法で
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払ください。入金確認後、発送手配をいたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 業務部(発送代行)
住所 〒107-0052 東京都港区赤坂2-13-19 多聞堂ビル
TEL 03-3584-2191
FAX 03-3582-5745
Email order@idj.co.jp



次号予告 (2010年9月1日発行予定)

中南米

日本と歴史的関係が深く、また近年エネルギー資源や食料の供給地として注目を集める中南米に対するJICA協力を特集します。

未来を、耕せ。



なんとか
しなきゃ!

見過ごせない — 55億人

なんとかしなきゃ!

検索

人生の喜びを感じてほしい

プロテニスプレーヤー クルム伊達 公子

KIMIKO DATE-KRUMM



PROFILE

1970年京都府出身。小学校1年からテニスを始め、中学・高校時代から活躍。89年にプロに転向。日本人女子テニス選手として、史上初の世界ランキングトップ10入りを果たす。96年に現役引退、08年に復帰。98年から、日本全国の子どもを対象にした活動「カモン!キッズテニス」を開催。02年、JICAオフィシャルサポーターに就任してからは、その活動を途上国にも広げている。

6歳の時にテニスと出会い、ずっと、テニスと共に人生を歩んできました。自分に対する自信、他人を思いやる気持ち、世界に出る機会、そして各国にできたたくさんの友達…。振り返ってみると、私は人生で欠かせないもののすべてを、テニスを通じて得てきたような気がします。

一度現役を引退した後、これまで応援してくれた日本の皆さんに恩返しをしたいと、子どもたちを対象に「カモン!キッズテニス」を始めました。単にテニスの技術を伝えるだけではない。スポーツを通じて、机の上では学べない、何かを感じてもらうきっかけになればと思ったからです。そして、2002年にJICAのオフィシャルサポーターのお話をいただいてからは、その活動を途上国でも展開しています。

実は私にとって、テニスはずっと

“先進国のスポーツ”というイメージがありました。ボール、ラケット、コートなど、まずは“道具”がそろわなければ、練習も試合もできないからです。それ故に、対戦する選手も、試合をする国も先進国で、選手時代は途上国とは無縁でした。

でも引退後、縁あって中国に行く機会があり、路上で物ごいをしている子どもを見て衝撃を受けました。今まで目にしたことのない世界…。私にできることは何だろうと考えた時に、そこにあったのが、やはり“テニス”だったんです。

途上国では、ラケットを見るのも触るのも初めてという子がほとんど。興味津々の目で私を見ながらも、最初は「海外からお客さんが来た」と、とても緊張しています。それでも一緒にボールを打っているうちに、いつの間にか、元気な笑い声があふれて

いるんです。不思議ですね。

正直言うと、途上国でキッズテニスをやることに迷いが生じたこともあります。私が帰った後、彼らはずっとテニスが続いていけるとは限らない。逆に、テニスの楽しさを知ってしまうことは、彼らにとって酷なのではないかと…。でもラケットを握る彼らは、本当に生き生きとしています。テニスを通じて、“生きる喜び”を感じてもらうことだけでも、決して無駄なことではない。そう思えるようになりました。

現役復帰してからは、なかなか途上国に行く時間がないのですが、国内のテニスの試合で中古ラケットの回収を呼び掛け、途上国の子どもたちに届ける活動を続けています。現場に行かなくてもできることはある。あなたの家に眠っている何かが、国際協力のきっかけになるかもしれません。